

砂鉄のみち

分け入っても分け入っても青い山」漂泊の俳人、山頭家がこの句を残して仏教で行乞流転の旅にでたのが梅雨の盛りの6月末であった。以来15年の流転の旅なかでも行き暮れてなんとここに水のうまさ」へうへうとして水を味う」と美味の水を詠み、深い森が随所に登場していた。国土の7割を山地が占める日本列島は、地球儀をグルリとまわしても同緯度で珍しいほどの水が豊富で緑深き国である。

台風と秋雨、冬の豪雪そして梅雨、どれ一つとっても豊かすぎるほどの雨をもたらし、加えて折々に通る低気圧や猛暑の季節に一服の清涼剤のごとく降る雷雨など四季をとらして間断なく雨が降る。その量は年間一八〇〇ミリと世界平均のおよそ倍である。東アジアのモンスーンである梅雨の期間、東日本では二つ月足らずの間に年間の三分の一近い雨が降る。豊かな森が水を蓄え、豊かな雨が森の自然回復をもたらし輪廻再生でいまなお深い森が残っている。

司馬遼太郎の「街道をゆく」シリーズに「砂鉄のみち」という「木が鉄を生む」という話が載っている。当時の鉄はタタラで作った。鋼（はがね）鉄を砂鉄から作るのに大量の木炭がいる。木炭を作るのに薪が必要で山の木々が切られる。鉄を作る一連の作業に4昼夜か

かり、これを「一代」と呼んだという。一代で二二〇〇貫の鉄、すなわち四五トンの鉄を作るのに必要な砂鉄が二五トンで同量の木炭が必要となる。一年六十代として九〇〇トンの木炭が必要で、それつくる数倍の薪を切って山が一つ二つ裸になる。木がなくなれば木を求めてタタラとも移動する。かくして鉄が森を食べ尽くしながら進み、砂鉄のみに森が消えていったという。

日本の製鉄のルーツは中国大陸、そして朝鮮半島である。ともに古代を中心に鉄の生産が盛んでそれによる乱伐で山は裸となった。ひとたび荒れた中緯度の乾燥地帯での森は表土の流失を招き再生は難しい。ジンギスハーンが疾走した内陸の草原地帯にもかつては豊かな森があったというが、森は戻らなかった。

アジアだけではない。ローマの収奪で壊滅的な打撃を受けたが、数世紀をかけて見事に再生回復したイギリス南部の豊かな森が再び製鉄で破壊され、北部の森へそして隣国アイルランド、バルト海沿岸の地方の深い森へ手が伸ばされていった。薪の不足が石炭への利用の技術を生み産業革命へと進んだのは必然だろうか。アメリカ新大陸も例外ではなかった。東海岸の豊かな森林は製鉄に、巨木は世界制覇の船に利用され姿を消していった。森の木材の収奪で本国のイギリスと植民地との対立が独立への伏線ともなったの

が、森の木々がいかに国家間で重大であったかが知れる。といっても森が消えることには変わりがないが…。

森の衰退とともに文明が減んでいった。歴史のうえで最も古い森林破壊と文明衰退のできごとが、いまから約四千年前のメソポタミアの古代文明の衰退で起こった。極寒の世界記録は文明のない南極大陸上のポストク基地のマイナス八九・二℃であり、最高気温はメソポタミア古代文明の発祥の地のすぐ南のイラク南部のバスラの五八・八℃である。湾岸戦争で有名なこの都市は鹿児島付近の北緯35度の中緯度乾燥帯にあり中東の砂漠に囲まれている。この地方がかつて昼なお暗き鬱蒼としたレバノンスギで覆われていたとは、だれが想像できよう。当時を伝える『ルガメシユ』叙事詩のなかで、木々が太陽の光を差し込ませないほど鬱蒼とした森が茂り、森の守護神と都市文明側との戦いが続き、ついに文明側が勝利して森が切り開かれたという。文明が森を破壊したツケは大きく、灌漑用の河が埋まり塩害に苦しみ古代文明は滅んでいった。

四千年後の現代、ブラジルのアマゾン河の流域の熱帯雨林では焼畑農業で原生林が伐採され、アメリカのハンバーガーの肉へと姿を変えている。熱帯の大粒な雨が表土を流し森林の再生を難しくしている。日本のマンガやチラシなどの紙が東南アジアの熱帯雨林を

も破壊し続けている。砂鉄の鉄が森を喰い尽くす有様は、現代文明が石油という有限の資源を消費のみして繁栄している姿と再生不能の森の破壊とが二重写しに映り、現代文明の先行きを暗示しているようにみえる。

梅雨の時の集中豪雨では一時間雨量の最大が一八七ミリという熱帯なみの激しい雨が降って表土を洗うが、それでも森の復元力が勝り、破壊を食い止めて森の再生がうまくいったのが日本である。タタラの鉄で消えた森は手をかければ三〇―四〇年で人工の林として復活することができる。だが東アジアの好運な位置と急峻な山だけが森を守ったのではない。砂鉄のみちの森の破壊と自然の復元力を使つての再生への戦いが脈々と続いた結果こそが森が守られたのではなからうか。

気象大学校、村松照男